

ライフサイエンスイノベーション推進機構 トランスレーショナルリサーチ推進センター

脳・神経セミナー

日時：平成22年2月19日（金）17:30～18:30

会場：松岡キャンパス臨床研究棟3階会議室

演者：友田 明美 先生

熊本大学大学院生命科学研究部

小児発達学・准教授

演題：小児慢性疲労症候群・睡眠障害としての
不登校と、そのバイオマーカー

【要 旨】

近年、子どもたちの学力低下のみならず、生命力の低下さえもが心配され始めている。キレる子ども、不登校、ニートなど、いわゆる子どもの問題が社会問題として顕在化して久しい。ストレスの多い現代社会に生きる私たちの中で慢性疲労に悩んでいる人は多いが、この疲労は子どもたちにとっても非常に身近な問題となっている。多くの子どもたちが疲労を訴える事実は、これまで様々な形で報告されてきた。

私達は“小児型慢性疲労症候群 (CCFS)”に代表される不登校児の病態について、局所脳血流 (Curr Ther Res, 1995)、深部体温概日リズム (Biol Psychiatry, 1997)、神経内分泌機能 (JCFS, 1997)、神経免疫機能 (Psychiatry Res, 2005)、末梢血の時計遺伝子 mRNA 発現 (Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol, 2005)、糖代謝 (Clin Endocrinol, 1997; Neuroimage, 2009) などの多面的な評価を行ってきた。更に2006年にはCCFSの国際診断基準が制定されている。

さまざまな検査所見でCCFS児では明らかに脳機能異常が存在し、睡眠覚醒リズム異常を呈することがわかってきた。高照度光治療は5,000ルクスの光を朝から照射し、朝方にずれ込んでいるメラトニン分泌を抑制して、すっきりと目が覚める生活リズムを取り戻すことが可能である。加えてCCFS患者の時計遺伝子を解析した結果、彼らの体内時計のリセットに成功した。

CCFSは、本人の将来、家族の将来に大きな影響を与え、一部「社会的引きこもり」に繋がる。小児のさまざまな訴えに対して、予防を含め、なぜきめ細かい治療が重要な意味を持つのかを、私たちは理解していかなければならない。

教職員、大学院生の皆様のご来聴をお願いいたします。

〔福井大学トランスレーショナルリサーチ推進センター〕